

## 小児の事故防止への介入研究

(分担研究：小児の事故とその予防に関する研究)

研究協力者 鹿児島県保健福祉部保健予防課 宇田 英典

**要約：** 小児の事故防止に対する保健指導の効果を検証し、小児の健やかな発育を促すために有効な保健指導や環境の整備推進を目的に、乳児健康診査等の場を用いて介入研究を行った。本年度は、昨年度の予備調査に引き続き、介入前調査及び事故防止に関する介入を実施した。調査対象は、鹿児島県内の4市8町の6～7か月児健康診査・健康相談に参加した乳児と保護者とし、介入群（2市2町）と非介入群（2市6町）とに分けた。このうち介入群については、通常の保健指導の他、集団指導、パンフレット、ステッカー、チェックリスト等による介入を行った。介入前調査の結果については、介入群と非介入群の間に大きな差は見られなかった。今後、介入を順次行い、介入後の両群を比較検討していく予定である。

**見出し語：** 小児の事故防止，介入研究，乳幼児健康診査，保健指導

### 【はじめに】

少子化が進むわが国において、不慮の事故死を予防する対策は重要な課題の一つであるとされている。

一方では、母子保健法の改正に伴い、身近なサービスの集約化の一環として平成9年度からは乳幼児健診が市町村で一元的に実施されるようになった。

このようなことを背景に、事故防止に対する保健指導の効果の検証と、有効な保健指導や環境の整備推進を目的に、乳幼児健康診査の場を用いて介入研究を行った。

具体的には、平成8年度の本研究で実施した予備調査を踏まえ、9～10年度には、介入群と非介入群の地域において、介入研究を行う。そして、本年度（平成9年度）は、介入前調査を行い、介入群と非介入群との間に介入結果に影響を及ぼしうるような差がないことを確認するとともに、実際に介入を行った。

### 【対象と方法】

今回の調査の概要を図1に示した。

調査対象は、鹿児島県内の4市8町の6～7か月児健康診査・健康相談に参加した乳児と保護者とし、介入群（2市2町）と非介入群（2市6町）とに分けた。地域の選定については、3つの保健所管内でそれぞれ介入市町村と非介入市町村というように市町村を1つの単位とした。つまり、同一市町村を2つに分けるというやり方はとっていない。

両群には共通の質問紙を健康診査・健康相談時に配布し、記入を求め介入前調査とした。

このうち介入群については、介入前調査後に通常の保健指導の他、集団指導を行った。その際、図2、3に示したような事故防止のためのパンフレット、ステッカーを配布した。ステッカーは家庭内の身近な場所に貼ってもらうようお願いした。その後、対象児が1歳の時に、介入群のみチェック

リストを郵送した。これに対して、非介入群については、通常行われる保健指導にとどめた。

介入前調査については、平成9年7月から開始し、順次介入に入る方法をとった。今回の報告では、平成10年1月までに集まった介入群428、非介入群334、計762を分析対象とした。

### 【小児事故防止研究会】

今回の研究にあたり、医師、保健婦等からなる小児事故防止研究会を設置し、介入研究の対象及びモデル地区選定、調査項目やパンフレット、ステッカーの作成など介入群への指導内容等について検討した。

### 【結果】

対象の属性を表1に示した。性別、出生順位については差はなかった。また、主たる保育者については、いずれも90%近くが母親であった。

調査時点（生後6～7か月）での乳児の発育・発達の状況を表2に示した。両群において特に差は見られなかった。

表3に保護者が乳児の事故を防止するために日常生活の中で注意していることを示した。両群において特に差はなかった。

以上の結果より、今回の介入前調査の範囲では、介入群と非介入群に大きな偏りは認められなかった。

### 【考察】

#### 1 介入モデルの限界について

今回の介入研究にあたって図1のようなモデルを作成したが、6～7か月の健康診査・健康相談という場を利用しているということから、全く保健指導がなされない厳密な意味での対照群を設定することは事実上不可能であった。そのため非介入群を通常の保健指導を行う群としているところに

本研究の介入モデルの限界がある。

#### 2 介入方法について

今回は、介入群での介入方法として、介入前調査後の集団指導を行い、パンフレットやステッカーという媒体を配布した。また、対象児が1歳の時にチェックリストを送付し確認してもらうようにした。しかしながら、一方的にステッカーを渡してもそれがしかるべき場所に貼られていなければ介入の意味はなくなってしまうため、この点を何らかの方法、例えば介入後調査の中での質問に加えるなど、により確認する必要があると思われる。

#### 3 他の交絡因子について

今回行った介入前調査においては、介入群と非介入群の間に、偏った結果は見られていない。しかし、タバコの誤飲事故における、いっしょに暮らしている人の中での喫煙状況の有無など、今回の介入前調査で知り得なかった他の交絡因子となりうるものについても何らかの検討が必要であろう。

#### 4 小児事故防止研究会について

今回、民間病院の医師や行政関係者からなる小児事故防止研究会の中で、研究方法等を検討した。医療機関サイドでの事故に対する情報と行政との情報の共有などもこれからの課題であろう。

#### 5 今後の展開について

今回得られたデータをもとに、介入群での介入を終えた後、対象児が1歳6か月になった時点で、介入群及び非介入群に介入後の調査を実施し、両群の比較において、何らかの介入効果が見られたかを検討することになる。

乳幼児健康診査や健康相談における保健指導は、限られた時間、場所、人数という条件のもとで行われ、しかも事故防止に限定することは難しいため、効果的な指導方法の開発も重要な課題であろう。

# 研究デザイン

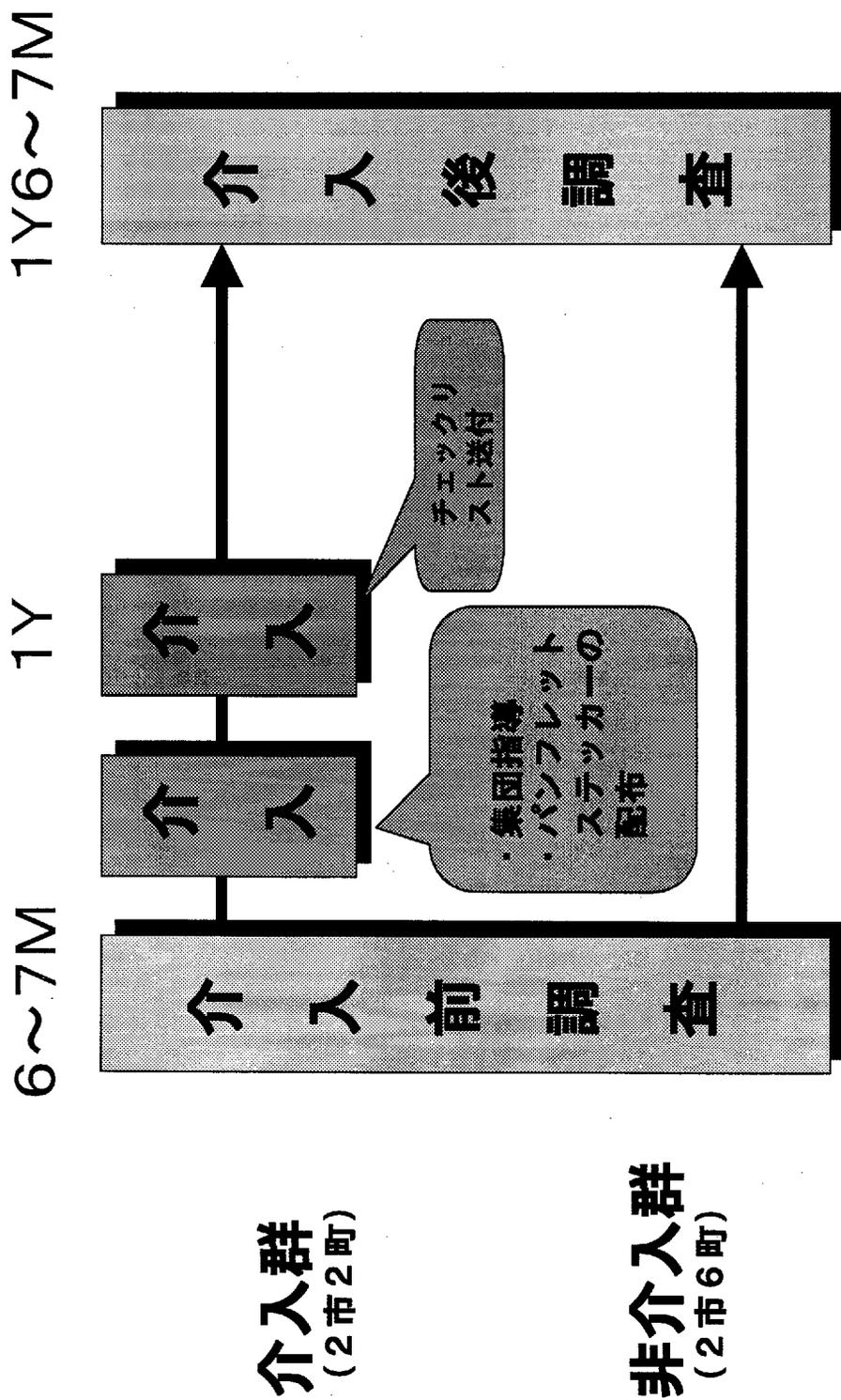
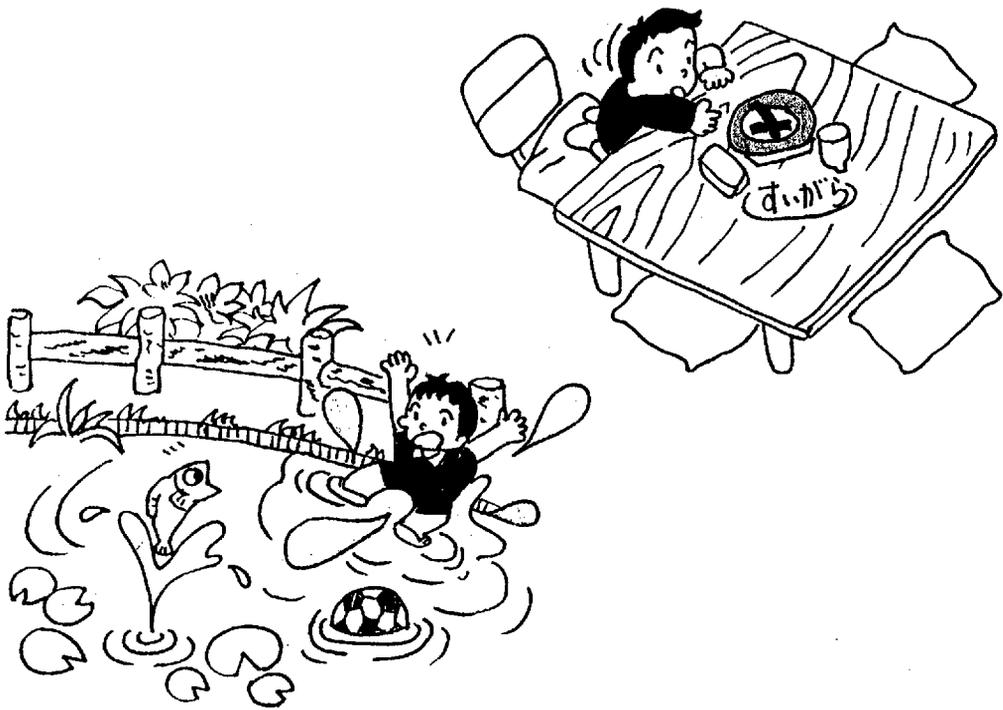


図1 調査の概要

子どもの事故防止のために

# 安全確認

家の中も外も 危険がいっぱい

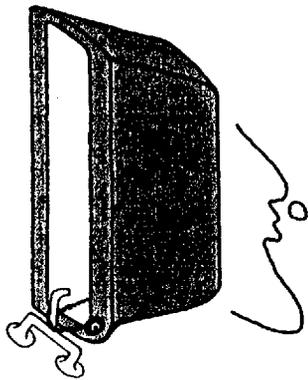


鹿児島県保健福祉部保健予防課

図2 パンフレット

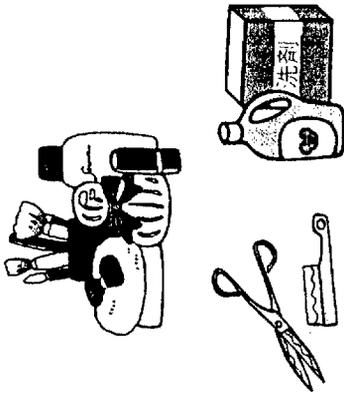
### お風呂場

- ・浴槽の水をぬいていますか？
- ・浴室のドアには鍵がかかっていますか？



### 洗面所

- ・洗剤、化粧品等手の届かない所にありますか？
- ・カミソリなど危険な物はきちんとしまっていますか？



### 台所

- ・包丁、ナイフ等危険な物はきちんとしまっていますか？
- ・ポットや鍋は手の届かない所にありますか？



### 居間

- ・たばこ、ピーナッツ薬、コイン等はかたづいていますか？
- ・おもちゃの部品等落ちていませんか？

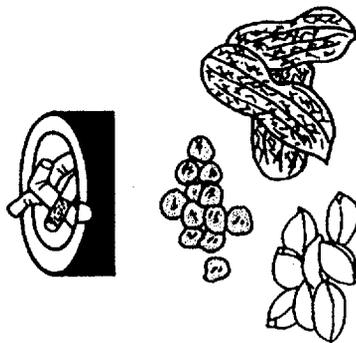


図3 ステッカー

表 1 対象の属性

		介入群 (N = 428)	非介入群 (N = 334)
性別	男 児	207 (48.4%)	164 (49.1%)
	女 児	221 (51.6%)	170 (50.9%)
出生 順位	第1子	196 (45.8%)	144 (43.1%)
	第2子	146 (34.1%)	119 (35.6%)
	第3子	67 (15.7%)	57 (17.1%)
保 育 者	父 親	3 (0.7%)	0
	母 親	376 (87.9%)	300 (89.8%)
	祖父母	11 (2.6%)	7 (2.1%)
	保育園	14 (3.3%)	8 (2.4%)

表2 可能な動きの状況

	介入群 (N = 428)		非介入群 (N = 334)	
	はい	いいえ	はい	いいえ
お座り	265 (61.9%)	160 (37.4%)	204 (61.1%)	125 (37.4%)
寝返り	398 (93.0%)	29 (6.8%)	314 (94.0%)	20 (6.0%)
ハイハイ	191 (44.6%)	233 (54.4%)	168 (50.3%)	164 (49.1%)
つかまり立ち	116 (27.1%)	308 (72.0%)	104 (31.1%)	228 (68.3%)
ボタン積み木に	323 (75.5%)	98 (22.9%)	275 (82.3%)	59 (17.7%)
興味				
音や動く物に	425 (99.3%)	3 (0.7%)	332 (99.4%)	2 (0.6%)
興味				
口に入れる	407 (95.1%)	21 (4.9%)	321 (96.1%)	13 (3.9%)
車に乗ると喜ぶ	293 (68.5%)	130 (30.4%)	251 (75.1%)	79 (23.7%)
夜はベビーベッド	67 (15.7%)	360 (84.1%)	42 (12.6%)	290 (86.8%)
椅子に座れる	203 (47.4%)	217 (50.7%)	159 (47.6%)	170 (50.9%)

表3 日常生活の中で注意していること

	介入群 (N = 428)		非介入群 (N = 334)	
	はい	いいえ	はい	いいえ
1 階段やベランダに柵 をしている	114(26.6%)	309(72.2%)	81(24.3%)	251(75.1%)
2 子どもが起きている 時は目を離さない	357(83.4%)	70(16.4%)	288(86.2%)	45(13.5%)
3 子どもが寝ている周 囲に物をおかない	399(93.2%)	29(6.8%)	305(91.3%)	26(7.8%)
4 ドアは閉じる	316(73.8%)	109(25.4%)	246(73.7%)	86(25.7%)
5 テーブルの上に熱い ものをおかない	371(86.7%)	56(13.1%)	297(88.9%)	37(11.1%)
6 子どもを家に一人に しない	413(96.5%)	15(3.5%)	314(94.0%)	17(5.1%)
7 子どもを車に一人に しない	409(95.6%)	17(4.0%)	320(95.8%)	11(3.3%)
8 タバコを子どものま わりにおかない	421(98.4%)	7(1.6%)	326(97.6%)	6(1.8%)
9 薬を子どものまわり におかない	417(97.4%)	7(1.6%)	326(97.6%)	5(1.5%)
10 入浴後に浴槽の水を すぐ抜く	186(43.5%)	234(54.7%)	131(39.2%)	200(59.9%)
11 ストーブや扇風機な 度に柵をする	261(61.0%)	154(36.0%)	207(62%)	119(35.6%)



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約: 小児の事故防止に対する保健指導の効果を検証し,小児の健やかな発育を促すために有効な保健指導や環境の整備推進を目的に,乳児健康診査等の場を用いて介入研究を行った。本年度は,昨年度の予備調査に引き続き,介入前調査及び事故防止に関する介入を実施した。調査対象は,鹿児島県内の4市8町の6~7か月児健康診査・健康相談に参加した乳児と保護者とし,介入群(2市2町)と非介入群(2市6町)とに分けた。このうち介入群については,通常の保健指導の他,集団指導,パンフレット,ステッカー,チェックリスト等による介入を行った。介入前調査の結果については,介入群と非介入群の間に大きな差は見られなかった。今後,介入を順次行い,介入後の両群を比較検討していく予定である。